法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

<研究>沖縄糸満漁業に関する人文地理的研究

長井，善達

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
44
(終了ページ / End Page)
51
(発行年 / Year)
1956-05-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026565

沖縄糸満漁業に関する人文地理的研究※

長井　善煌

沖縄本島南端の糸満町は漁業によって発展した町である。特色ある刺網，もぐり漁業，追込網などによって知られ，漁船数，漁獲高ともに沖縄首位を占めていた。この小論は戦前、戦後の変遷を通じて考察した糸満漁業の変化と、その人文地理的特徴を論じたものである。現地で数々の御教示をうけた糸満漁業協組，町役所，福元久雄氏はじめ多くの方々に厚く御礼申上げる。

1、序　論

糸満町は沖縄本島南端の、東シナ海に面する漁業根據地であり、町は隆起サンゴ礁から成る小さな台地の上に位置する。②町の面積は隣接村の面積に比してきわめて狭い。

たとえば隣村の兼城（カネグスク）村は1Km²あたり579人，高嶺（タカミネ）村で397人に対し、糸満町では8,821となっている（1952）。耕地面積は592；468町歩にたいし，糸満は41町歩にすぎない。海岸近く急崖がせまり、岩石の露出がおおいという自然のためだけではなく、後述のようにその歴史性によって、このような他村と異なった特殊性がつくられたのである。自然條件については、漁に出られぬ季節風の冬（12月頃まわり干），台風季の危険，モグリ漁のできる海底地形などの制限などを指摘するにとどめる。経済生活について業態別人口を指標にとれば，1941年－1954年の変化は次のように要約される；(1) 総世帯数1652から3244戸への激増，(2) 農，工業従事者数の停滞，(3) 水産業従事者400戸から943戸への激増，(4) 商業人口の激増 (5) 運輸，駐留軍要員の出現－8%，260戸である。戸数増加は、日本本土、外地（とくに旧委任統治領）からの引揚，那覇港の米軍による接収のため糸満が貿易港となり，官公署が移転したことなどによる、現在，水産，商業人口合計で有業人口の50%を占める、さらに統計を分析すれば、糸満は漁業の町という色彩よりも、

※ 筆者は卒業論文提出後，急に故郷沖縄に帰ることとなったため執筆することが出来ず，この文は渡辺一夫助手の厚意によりまとめていただいた。

原文では興味深い沖縄の同族集団③糸満漁業の起源等についてふれているが、頁数の関係で省略し、沖縄の社会状勢を考慮して書き替えた部分があることを附記する。

―― 編集者 ――

第1表　経営面積別農家数（1954）

	5ヒ未満	5ヒ～1反	1～3反	3～5反	5～10反
農家数	12	39	45	31	7
米麦	一反	6.5	45	62	21
その他食用作物	6	26	45	62	14
ヤサイ	—	3.2	13.5	15.5	3.5
工芸作物	—	—	—	—	—
その他		3.2	31.5	15.5	3.5

沖縄政府自治7周年記念誌，市町村編による。

水産業と商、工その他との「複合」がみられる。農業については農家経営面積は第1表のごとく，1町歩以上の経営者は見られず，水田は稲の2期作が大部分である。換金作物として、他町村では工芸作物である。サトウキビを多く作るが、糸満では現金収入は、農業面からはほとんど得ていない。

商業は、前述のように一時的に貿易港とされたため、外国製の高級な消費物資が街にあふれたこと、を指摘するにとどめよう。漁業に関連のある商業部門は零細な漁民の妻や娘が行う鮮魚の小売である。内地においてもある漁村では同様の特色をもつが、多くの民族学者の云うごとく糸満にあつては家族内での財産私有が特殊に分化しているため※糸満の女子の扱う商業は多きな比重を占める。こうして、良い意味での「商魂たくましい」糸満の女性が誕生した。市場は戦前とことなり、三和村、兼城（カネグスク）への交通路に近い海岸通りである。

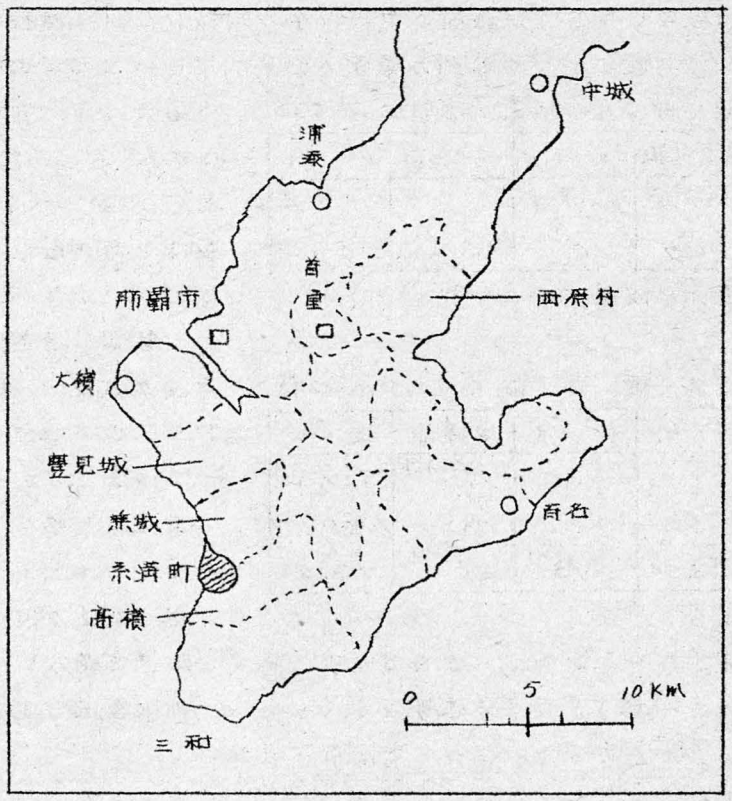
戦争は過去に盛んであつた綿木綿の手織業を破壊し、戦後の特殊事情は内地からの原料棉供給を杜絶させ、県下、生産額の70％を占め，250戸の家内工場（1941）を絶滅した。いまでは建築業、漁船代用、修理、自動車修理業などが代りを占めている。漁家の家庭内部においても職業の分化は烈しい。前述の女性の財産製度と関連して、家長は自分が働き得る限りは、子女がいかに多額の収入を得てもそれに頼ることをせず、嫁も娘も独立した収入をもつことを注意したい。従つて一家のうちで、たとえば漁業（老主人）商（妻）工（長男）裁縫（その妻），商（長女）というように職業は分化しているのは戦後も同様である。

※　男子が漁から帰つてくると、その妻や娘、妹（16才ぐらいからであるが）は海岸で待機し、男子の漁獲物を値ぶみして買ひとり，更に市に運んで売りさばき利益は自分のものとなる。内地のヘソクリ、ホマチにあたる。現在、インフレ，度々にわたる紙幣交換，復興の入費、生産用具出費のためこの制度は少くなった⑥

2、本　　論

1、糸満漁業の歴史

16～17世紀に班田收授制が施のれたころ、糸満は土地狭く，他村より土地の割当率が低かった、そのため、糸満では一只漁業に努力を注ぐことになったといわれる、㊀住民は上納を嫌ばず、土地私有は認められなかったため、家族を養うより以上の耕地面積は欲しない。㊁1874年兼城（その時は糸満も同村の一部であった）総人口1874は現在人口の1/2にも達しないことを見れば，しばしば云われる，「土地が狭隘であったから」漁業をはじめたという考えはうなづけない。割地慣行も他村が2年以上1交替であったのに糸満で1交替であったことは、すでに糸満が16～17世記から他の農村とは異って漁村であったことを暗示する。漁民にたいしては農民と異り課税されなかった。



第1図　糸満町民の祖先の地関係図

船は5反帆（およそ60石積程度）以下は無税であつた。したがつて、「他の土地において豪農放逸、失敗者がこの地に流浪して居を構えるようになつた」⑪ということもあながち否定し得ぬ。筆者の予測では、半農半漁の部族が封建制下における経済の進展とともに那覇・首里の都市化、農村のある程度の分化に対応して漁業が専門化することが可能となり、近隣の村から人々が移住したものであるが、課税の盲点をたくみに利用したことも移住の傾向を助長した、という考えをもつている。

2、沖縄における糸満漁業の地位

彼らの父祖の時代から、漁民として糸満人の名はひろく知られていた上⑫海外出稼（漁業）者からの送金、タカセ貝の輸出などにより、糸満の経済的地位は戦前にはきわめて高かつた。現在までの変化を見るために戦前と対比したいのであるが数字については戦前の資料は全く消滅したので戦後の統計による他はない。第2表によつて糸満の漁家の比重が大きいことが知れる。

第2表　；戸数人口よりみた糸満の特色（1953）

	総戸数	漁家戸数	総人口A	漁家人口B	B/A
沖縄	156.4千	4.4	746千4	17.3	2.3%
糸満	3.2	0.9	10.1	4.2	26.0

琉球政府、経済局水産課統計による

沖縄の漁業従事者の1/4は糸満人であり、第3表その他によれば漁船数は沖縄で最も多い、ことがわかるが、同時に、零細な資本による、多数の漁家の、刳舟を主とした小経営といつてよいこともわかる。

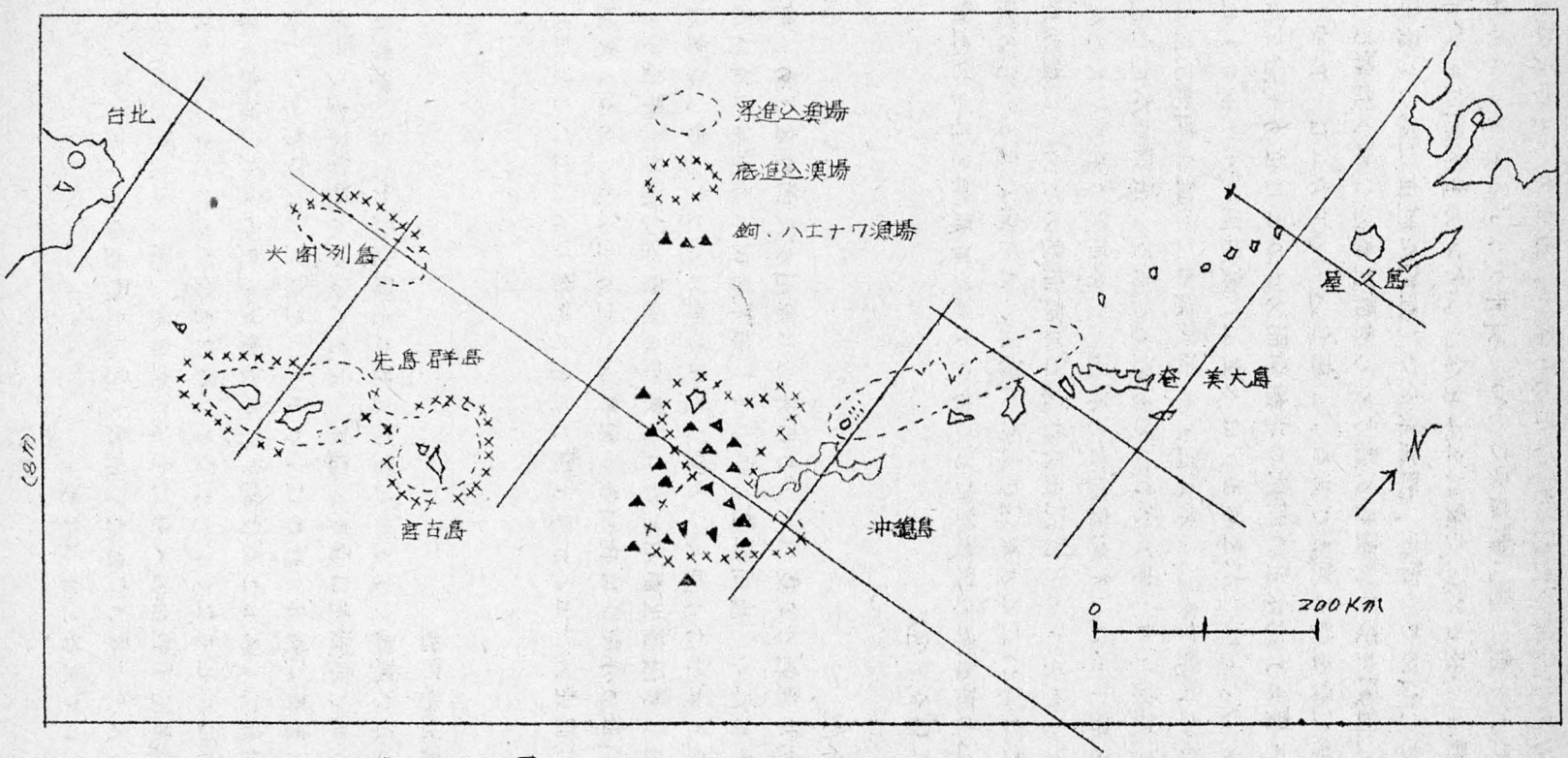
第3表　；漁業勢力調（1953、12月）

	漁業者数	動力船	刳舟	漁獲高	金額
沖縄	5.720人	161	908	22.1百万ポンド	207.1
糸満	1.213	25	300	1.8	28.2
率	21.1%	15.5	33.3	8.6	13.6

同上資料による

漁夫の主要な生産手段は長さ3間、巾3尺、新調して2万円ほどのサバニと呼ぶ刳舟である。乗員2－5名は親子、隣人、知己で構成される。往来は丸木舟であつたがいまは5分厚杉板のハギ舟で、動作軽快、運搬至便で、帆をかければ10ノットのスピードで快走する。

※　同族組織（ハラ、モンチエウ③）を調査したが、その結果糸満町民の祖先にあたる同族は第1図のごとき地方から集つてきていることがわかつた。これは在町の同族団29のうち、1つの小さな具志川（グシカワ）同族だけが町内に墓をもつことからも傍証される。④



第 2 図

いまは25馬力のガソリン機関を付けたのもある。漁法のうちで糸満を特徴づけるものはモグリ漁と追込網漁業である。刳舟から20－30尺の海に潜水鏡をつけて潜り、終日泳いで疲れをみせない。オ2の追込網はモグリ漁をさらに発展させたもので、現在，網漁業中で支配的な地位にある。袋網を定置し、八字形に垣網を張り、潜夫が遠方から魚群をおどしつゝ誘導して追込むという、非常に積極的な漁法である。「底追込」（アカムロ、アジ、テンジクダイ、カマス獲る）は水温の関係で沖縄南部の20ヒロ位の浅海で行うが「浮追込」（ダツ、トビウオを獲る）は八重山、波照間（ハテルマ）七島、十島、奄美大島に操業する。（オ2図）糸満漁業はこの追込網漁を主とするが全沖縄では釣漁業（カツオ）がもつとも盛んである。糸満でなにゆえ不振なのか？熟練を要するカツオ釣技術者の不足、団体訓練の不足，大きな遠洋漁船の不足，―― つきつめれば現在の行政上の諸問題のため、に他の地方の好漁地を利用できないことが原因である。戦前には糸満人は20㌧の漁船で外南洋や八重山の好漁地を根據地にしてカツヲ漁で好成績をおさめた輝かしい歴史をもつている。⑭

3．生産と分配

刳舟を除く動力漁船50隻は10㌧内外の小漁船が大部分を占め、所有は個人、共同以外はなく、共同経営といつても漁業者以外の所有者はいない。網は98ヵ統あるがやはり個人、6割、共同4割となつている（表を省略）、共同経営には船主が最高出資者となり、残りの出資者は船員、甲板員となり出漁するが、利益の分配率は機関長、船長1.5その他1.0である。乗組員の分け前の農物は前述カゴとくず子が買ひとり、仲買人のいないことは大きな特徴である。

4．糸満漁業の停滞性

勇敢ですばしこい漁民、すぐれた技術をもつ糸満漁民が不振の状態にあるのは何故だろうか？糸満港は遠浅に過ぎ、大きな漁船の接岸不能であるという地形の悪さもある。刳舟の時代にすぐれていた漁港も大型漁船には役にたたぬ。そして刳舟による小さな行動半径では漁場も狭められ、稚魚を獲りつくし，魚獲努力に対してむくいられるところはきわめて少い。これは悪循環となる。また漁業協同組合加入者は全漁業従事者1,213人中263人に過ぎぬ。未組織の漁家が多いことは、糸満人の利己的性質であろうか？漁港の設備も内地に比して見おとりがする。

日産1.5トンの給氷所・岩壁・「セリ」市場・漁船の造船所……などである。多量の漁獲に対応する處理場はなく、個人経営のカマボコ製造所がある程度である。

ここで観点をかえて漁民の心理の一端を覗うことにする。古来，いやしくも糸満の男として生をうけたならすべて漁業に従うものであることは云をまたない。しかし筆者のみた戦後の糸満人は、漁業に従事するが、他に有利な職があれば直ちにでも転職することをも辞さぬ風がみえる。その場合、漁業は不動産獲得の1手段となってしまう。戦後、糸満を中心に香港や鹿児島，離島との間に交易が開かれたが厳重な占領軍の統制をくぐって、生活のできない漁民は登記した「漁」船で他の商品を「釣って」来た。これで巨利を占めた者がおおかった。彼らは漁業をはなれて他の職業に転じた。那覇その他の軍港が解除されると、糸満はもとの漁村にもどりはしなかったが、さびれた。もし漁民のあいだに資本がなくても他の人との資本出資によって漁業会社をおこし大洋に乗り出すことはできる筈である。しかも、それは不可能である，というのは、沖縄漁業の将来にたいし希望がもてないからであると云えよう。漁民自身、将来に対しては絶望的である。彼らは「漁業は自分だけで終りにして、子や孫は他の職につけたい」と口をそろえて云う。しかし現実において、沖縄の地位は国際間に正規の地位を占めていない以上，戦前には実に盛んであった出稼ぎも不可能で，潜在的過剰人口、半失業者は激増し耕地は極度に狭められてしまった。かかる時に他への就職も容易でない以上、旧態依然たる漁法をもって子孫に伝授してゆかねばならぬことは、漁民自身がよく知っているのである。この問題は沖縄の国際的地位の正常化と直接に関係していることは明白である。

5、鮮魚の国内市場

貧しい沖縄にあって、魚は住民の最も安価なしかも唯一の食料蛋白源である。沖縄では蛋白は1人当1日平均5gを摂っているにすぎない。栄養的見地からみた1日最低量20gの1/4を充たすにすぎず、植物蛋白の摂取量を算定してもギリギリの線である。しかるにひとたび豊漁となれば忽ち過剰となり魚はくさってしまう。不幸にして適当な資料が刊行されていないので才5表をもってそれに代えるが、鮮魚価格は1948年のインフレ時にも、現在のデイス・インフレ時代にも精米、甘しょと比してつねに高率で、米、イモがほとんど平水準に戻ったのに魚はいまも500%にとどまっていることは消費の伸びない大きな原因である。魚は絶対的に足りないのである。さらに漁

養殖収入手薄、それから下記の理由がコスト高の原因をつくる。すなわち、行政上日本から分離していることは、日本漁船が沖縄の漁港で魚を売さばくことも、沖縄漁船が奄美や十島に荷を下すことも不可能であり、どんな遠方に行っても再び沖縄の港で荷を下さねばならないのである。政府も、戦政上製氷設備以外の港湾設備復旧，増設は最近になってやっと緒についたばかりである。

3 結　　語

以上，糸満の漁業を中心として，その地域性、とくに複雑な現勢下における現状を明かにしてきた、要約すれば、(1) 農、漁村間には没交渉なところも多いが⑤，糸満に関する限りかかることは見られない。それは糸満の厂史をみれば了解されよう。(2) 父祖の代からの刺網を主とする零細漁家の漁業がいまでも支配的である。これは漁場の拡大を制約し、水産資源の涸渇をまねいている。漁民の資本はゆたかにならない。(3) 「モグリ」漁と網漁業の結合である。「追込網」漁業は、糸満としては最高度に発展したが、大型漁船の漁法に比すべくもない (4) 戦前、漁業出かせぎ民の分布は東南アジア、旧委任統治領に及んだ。現在ではこれらの人々は送還され、土地の狭隘化とともに問題は大きくなっている (5) 要するに，沖縄漁業にたいして、より以上の発展を望むためには、沖縄のもつ国際的地位の向上をはかることが必要である。

主要参考文献（「」内は本文で省略した事項をのせたものである）

① 饒味克二；沖縄の集落　地理評　1943　10号
② 小牧実繁；糸満人とその地理的分布　地理評　1926　10号
③ 柳田国男(編)；沖縄文化叢書説
④ 仲松弾秀；糸満町及び糸満人の地理的研究　地理評 1944，2号
⑤ 小笠原長勝；瀬戸内海の漁村と農村　地理評　1941，7号
⑥ 糸満漁業協同組合長；上原氏の御教示による
⑦ 那覇市平良商事合資会社；福元氏の御教示による「年期奉公について」
⑧ ④に同じ
⑨ a.③に同じ　および
b.伊波普猷　沖縄考
⑩ ④に同じ「数百年前には人口稀薄であったことについて」
⑪ 糸満町役場；糸満概説
⑫ 安里延　；日本南方発展史
⑬ 青野寿郎　；漁村水産地理学研究「糸満の「モグリ」は海上のみで海女はいないことについて」
⑭ 渡辺東雄　；外南洋邦人水産業　　戸沢愛郎；沖縄水産一般
⑮ ⑬に同じ
⑯ 近藤東雄(編)；日本漁業の経済構造「多くの点について」